

調査成果報告書

長井市地域活性化基盤整備推進計画調査			
調査主体	山形県 長井市 まち・住まい整備課		
対象地域	山形県 長井市	対象となる基盤整備分野	<ul style="list-style-type: none">・ 観光交流拠点施設整備・ 上記施設の周辺道路整備・ 上記施設の周辺河川緑地整備

1. 調査の背景と目的

(1) 調査の背景

「長井」の地名は「水の集まる場所」に由来している。長井市は朝日、飯豊、出羽の緑豊かな山系に囲まれ、吾妻山系を源流とする母なる最上川、そして朝日山系を源とする野川が市の中央部を流れ、飯豊山系を源とする白川が市の南部で合流している「水」の豊かな地である。

最上川は、江戸時代に舟運が開かれ、酒田を経て遠く京・大阪との通商が行われるようになると、長井の船場は米沢藩の物資運搬の起点、商取引の町として藩の陣屋もおかれ、城下町米沢にならぶ商業都市として栄え、絹織物・反物などを取り扱う多くの豪商が現れ、栄華を誇った。このように最上川の歴史とともに発展してきた長井市は、地域固有の歴史・文化・風土を育みながら西置賜地域の中心都市としての役割を果たしてきた。

しかしながら近代に入ると舟運は、その役割を陸上交通に譲り、近年は長井市も人口減少や高齢化の進展、中心市街地の空洞化、農業・工業の停滞などの問題を抱え、さらなる活性化が求められている。

(2) 調査の目的

長井市のまちづくりは、「水と緑と花のまち」をテーマにこれまでも最上川の景観を歩いて楽しむフットパス整備事業を始めとする多くの取り組みが進められている。

本調査は、これらの取り組みを活かし、発展させながら、さらなる地域活性化の推進を図るための観光交流拠点施設の整備及び施設と一体となった周辺道路整備、河川緑地整備などの実現に向けた検討を行うことを目的とする。

2. 調査内容

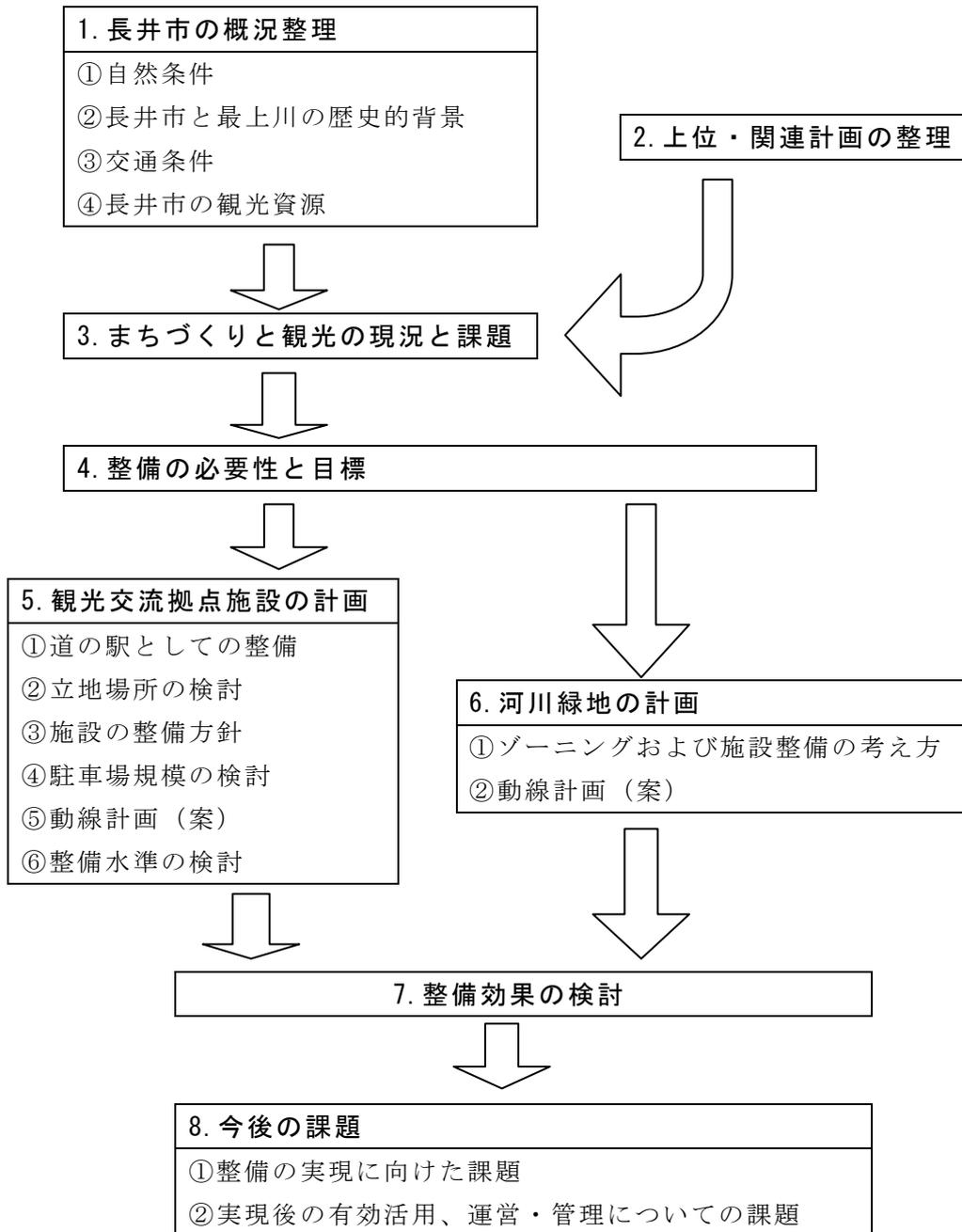
(1) 調査の概要と手順

長井市と国土交通省では、中心市街地を流れる自然豊かな最上川と舟運時代を醸し出すまちなみや歴史的建造物などのまちなか観光を連携させた「かわまちづくり」を進めており、フットパス等の整備を実施してきた。今後、さらなる観光交流人口の増大を図ることを目的に、かわとまちの観光の拠点となる「観光交流拠点施設」の整備を図るとともに、民間による交流拠点施設（地場産品直売所など）および行政による河川緑地の整備を実施する予定である。

本調査は、「観光交流拠点施設」整備のための基礎資料の収集、整備方針・整備効果の検討、並びに官民連携のあり方等を検討するものである。

調査の手順は、以下のフロー図による。

■調査の手順



(2) 調査結果

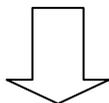
(2-1) 整備コンセプトと目標

【整備コンセプト】

- 車利用の観光客などのための「玄関口」「顔」の整備
- あやめ公園、白つつじ公園や、舟運時代の商家群や歴史的建物の残る街並みへ観光客を誘導するとともに、観光拠点を結ぶネットワーク拠点としての整備
- 市民同士、市民と観光客など、多様な交流と連携の場としての整備
- かわとまちを結ぶ施設として、既存フットパスのさらなる活用を図る施設

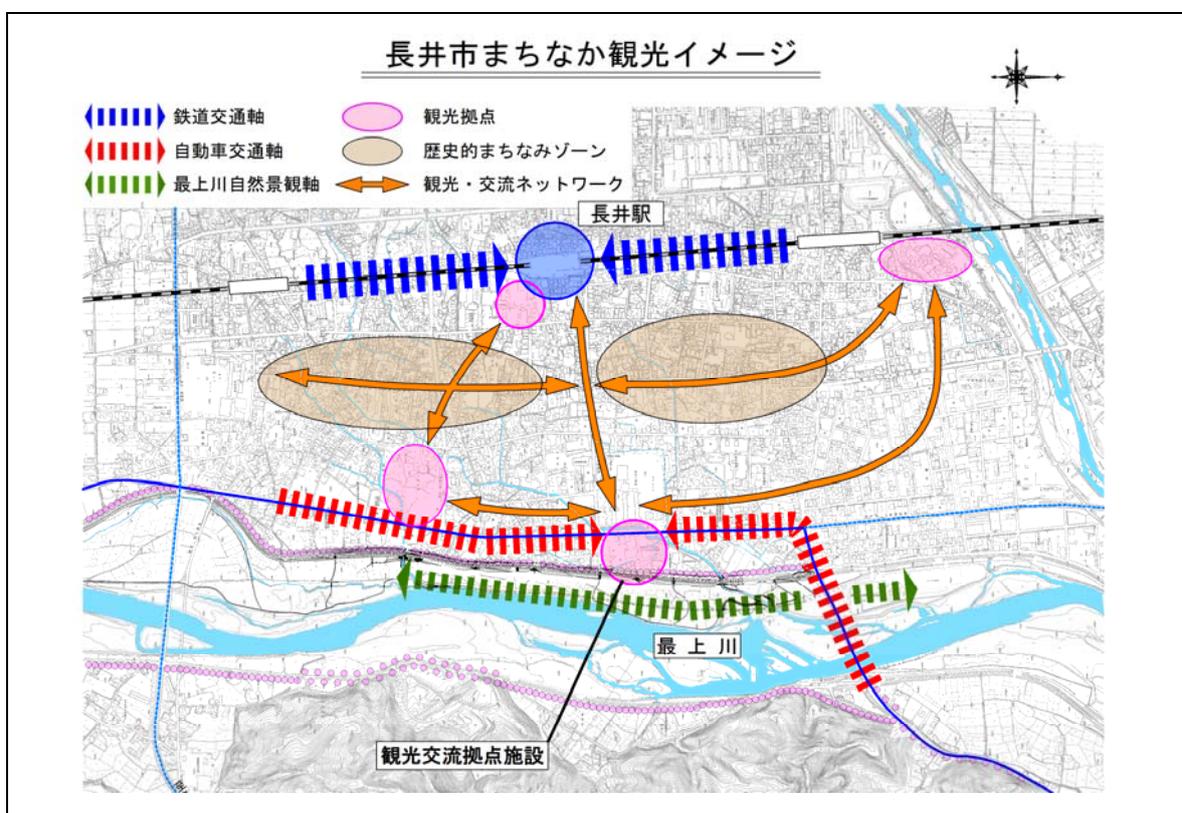
としての整備

- 市民と観光客が集う憩いの場、最上川の舟運の歴史・文化・自然などを学ぶ場としての整備
- 長井の魅力を来訪者などにアピールする場（情報発信・地場産品など）としての整備
- 市内循環バスのハブ駅機能を果たす場としての整備



【整備目標・計画テーマ】

かわとまち・市民と観光客をつなぐ賑わいの交流拠点



(2-2) 観光交流拠点施設の計画

本市の観光振興のためには自動車利用の観光客に対応する「玄関口」「拠点施設」の整備が必要である。

この「観光交流拠点施設」に求められる機能として、利用者に対するサービス機能（休憩機能、情報発信機能など）と地域振興機能（地場産品のPRおよび販売、地域の連携機能）があげられる。これらは、「道の駅」の機能と近く、地域連携の促進、全国的な宣伝効果などの視点からも「道の駅」の登録を図ることが望ましいため、観光交流拠点施設は、道の駅としての登録要件を満たす施設とする。

「道の駅」の登録を図るためには、道の駅共通のテーマを満足するとともに、地域の個性あふれる特色を示すことが大切である。

①「道の駅」としての整備に向けたテーマ

■道の駅共通のテーマ

●休憩・交流、地域連携による個性豊かなにぎわいの場の創出

■長井市の道の駅における固有のテーマ

●最上川の魅力を活かした「かわと道の駅」づくり

・近接する最上川河川区域と一体的な整備を図ると共に、既存の最上川河川緑地公園との連携を図るなど、川の魅力を最大限に活かした整備を図る。

●本市の観光ネットワーク拠点としての整備

・市の中心部という立地特性を活かした市内観光ネットワークの拠点整備を図り、「あやめ公園」、「白つつじ公園」、「花公園（フラワーガーデン）」（新規）と並ぶ拠点として観光案内、情報提供拠点としての役割を果たす。

・フットパスを活かしたネットワーク化を促進し、他の拠点や歴史的建物群との連携を強化する。また、市内循環バスや徒歩・自転車による市内観光を行うための交通結節点としての機能も期待される。

●交流とおもてなしの施設整備

・観光客・来訪者と市民との交流の場とし、おもてなしの地域づくりを推進する機能を併せ持つ施設整備を図る。

●市民も活用する「かわと道の駅」

・既存の最上川フットパスや市民直売所「菜なポート」を活用し、観光客などのためだけの施設ではなく、広く市民が活用して観光客などとの交流を図る場として整備を図る。

・最上川の舟運とともに発展してきた長井市の歴史・文化を広く市民や小中学生などが学ぶ場としての整備を図る。

・市内循環バスのハブ機能を有する場としての整備を目指し、市民と主要な公共公益施設を結ぶとともに、車で訪れた観光客と市内観光拠点とを結ぶ交通結節点としての整備を図る。

②立地場所の検討

■「かわ」に着目すると次のような条件が望ましい。

- できるだけ川に近く、なおかつ市民・観光客などが利用しやすい場所
- これまでに進めてきた最上川フットパス整備や最上川河川緑地公園整備などの事業との連携が図れる場所

■「道」に着目すると、次のような条件があげられる。

- 道路利用者に対するサービス拠点であるため主要な幹線道路からのアクセスが便利な場所
- 白つつじ公園、あやめ公園、（仮称）フラワーガーデンなどの他の観光拠点とのネットワーク化が図りやすい場所

■「まち」に着目すると、次のような条件があげられる。

- 市民が利用しやすい場所であること
- まちなかの観光資源とのアクセスが良く、観光客をまちなかへ誘導しやすい場所

上記の諸条件を総合的に検討し、国道 287 号に面した現在候補地となっている場所が最

適であると考える。

③施設の整備方針

観光交流拠点施設「(仮称)かわと道の駅」の整備は、休憩機能・情報機能・地域の連携機能の3本柱からなるが、本整備では、河川緑地公園との一体的整備が特色であり、河川ゾーンでのレクリエーション機能やスポーツ機能、河川ゾーンを利用したイベント機能なども考えられる。このため、観光交流拠点施設と河川ゾーンを結びつける仕掛けや、来訪者を河川ゾーンへ誘導するような仕組みがハード・ソフト両面で必要になる。

●休憩施設：道路利用者に安全と快適性を提供する施設

○駐車場：多くの人に利用してもらうための24時間利用可能な駐車場を整備する。

○「(仮称)かわと道の駅」と河川ゾーンを結ぶ連絡橋・歩道の整備や河川ゾーンへ誘導する案内・サイン等の整備を図る。

○トイレ

・24時間利用可能なトイレを、いつも安心、清潔、快適に利用できるように整備する。

●情報発信施設

○道路利用者の便宜を図るとともに長井市の良さを伝える施設として整備を図る。

・道路及び交通情報提供施設、電子情報板、電話・FAX・インターネットなどの通信情報施設

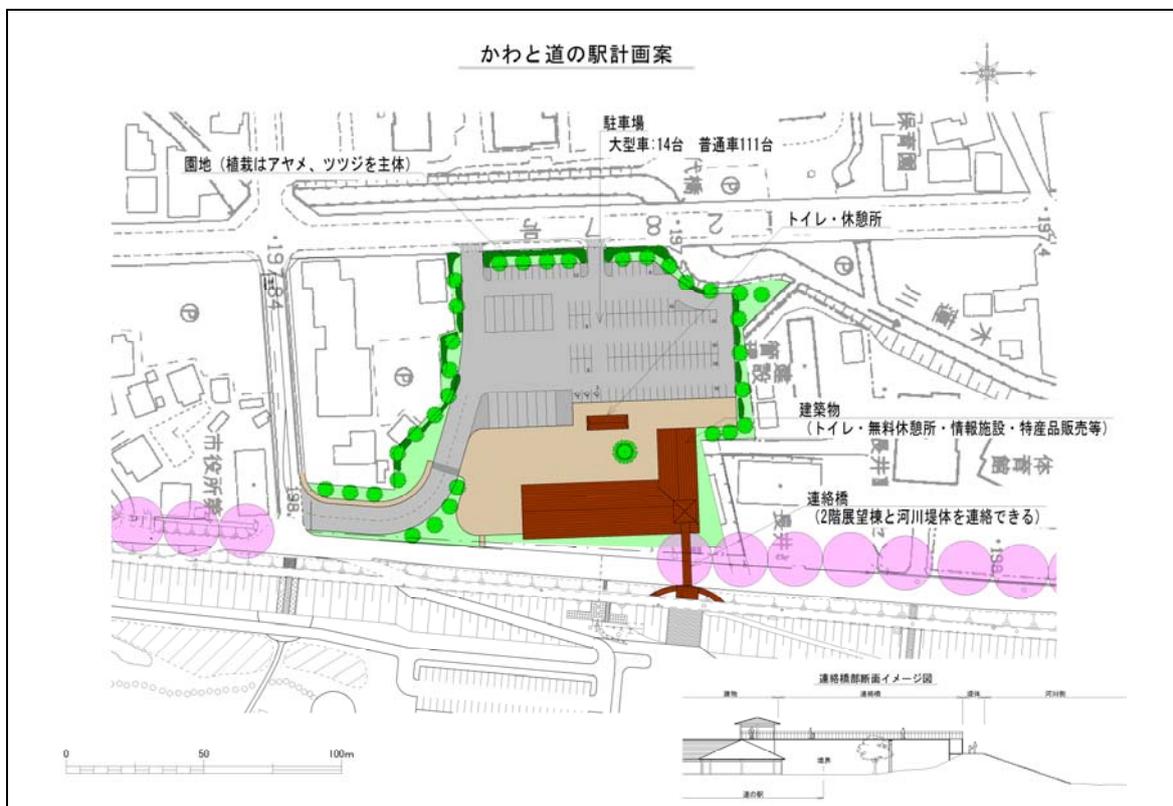
・観光案内などの地域情報提供施設、舟運の歴史・文化展示スペース

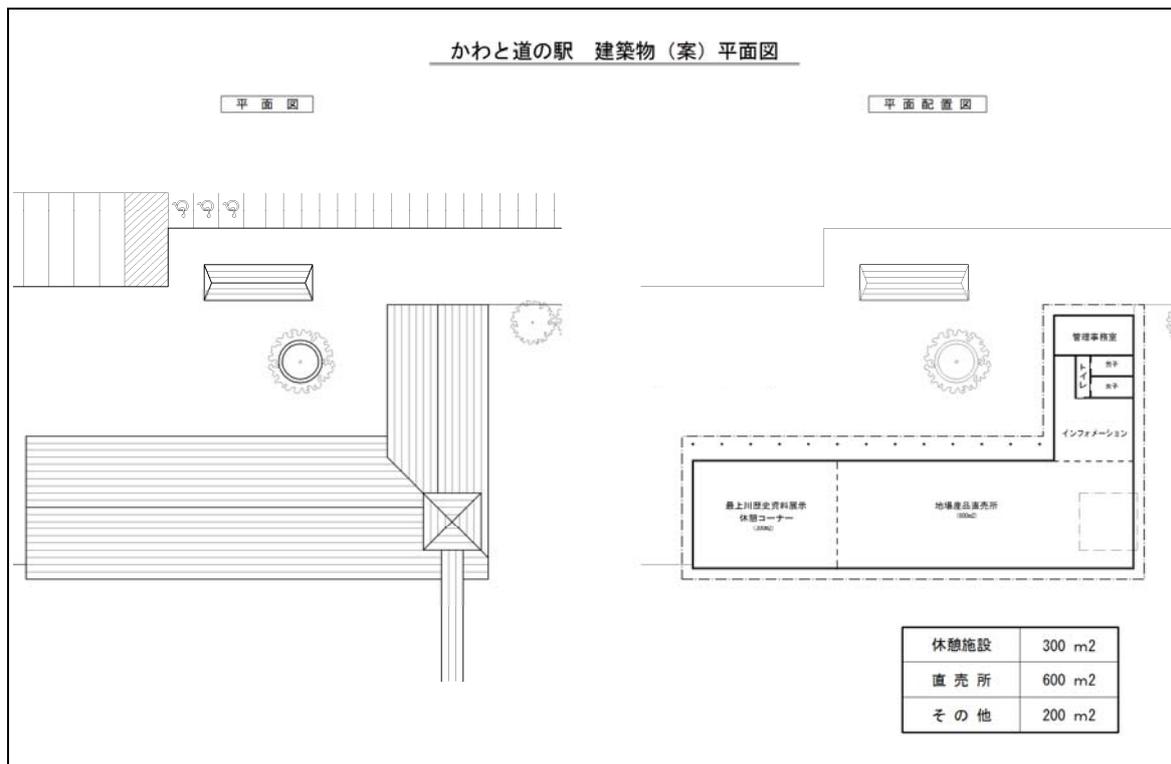
●地域の連携施設

○近隣市町村や近接する「道の駅」などとの連携による地域活性化を図る。

・地場製品の販売や各種イベント等の開催による地域連携と交流

●河川ゾーンとの連携・誘導施設





(2-3) 最上川河川緑地の整備計画

観光交流拠点施設「(仮称) かわと道の駅」に隣接する最上川河川敷一帯を河川緑地として整備を図り、整備済みのフットパスと合わせて観光客や市民に川の魅力を知ってもらうエリアとする。基本的なゾーニングと施設整備の考え方は次のとおりである。

① コミュニティゾーン

- ・整備区域の北側（下流側）にあたる区域は、「(仮称) かわと道の駅」からのアクセスが良いエリアであるため、コミュニティゾーンとして観光客や市民がフットパス等を活用して、最上川の自然に親しむとともに、イベント等をつうじて交流を広めるゾーンとする。整備する施設として、北側から順に以下のものを考える。

● 舟運の歴史・文化広場（舟通し水路（整備済み））

長井橋の南側約 250m、宮の船着場跡付近には、国土交通省の「かわまちづくり支援事業」の一環として舟通し水路と歴史案内看板が 2011 年 9 月に完成した。

観光客や市民が最上川舟運の歴史や文化と触れ合う場所としての整備を図り、歴史・文化の記念碑としてのモニュメントや休憩施設の四阿などを新たに整備する構想である。

● 梅園（既存）

河川敷に現存し、梅の見ごろの時期には茶会等が催されている既存の梅林の活用を図るものである。休憩施設として四阿を整備するとともに、梅林付近に駐車場（35 台規模）、可動式トイレを設ける構想である。

● 交流広場

「(仮称) かわと道の駅」施設から最もアクセスの良い場所に交流広場を整備する。各種イベント等の開催により市民と観光客などの交流を促進するにぎわいの広場である。交流広場に隣接して駐車場（50 台規模）を設ける構想である。

● 花畑

「水と緑と花のまち」を表現する施設として、季節に応じた花を観賞できる花畑の整備を図る。また、花畑付近に最上川の水辺を身近に体感できる親水護岸を設ける構想である。

②市民利用ゾーン

整備区域の南側（上流側）にあたる区域は、「(仮称)かわと道の駅」から遠くなるため、主に市民の利用を想定したゾーンとして整備を図る。

●スポーツ広場

フットサルやソフトボールなどができる多目的グラウンドやゲートボール場などを整備し、市民の方々のスポーツとのふれあい、健康増進への寄与を図るものである。

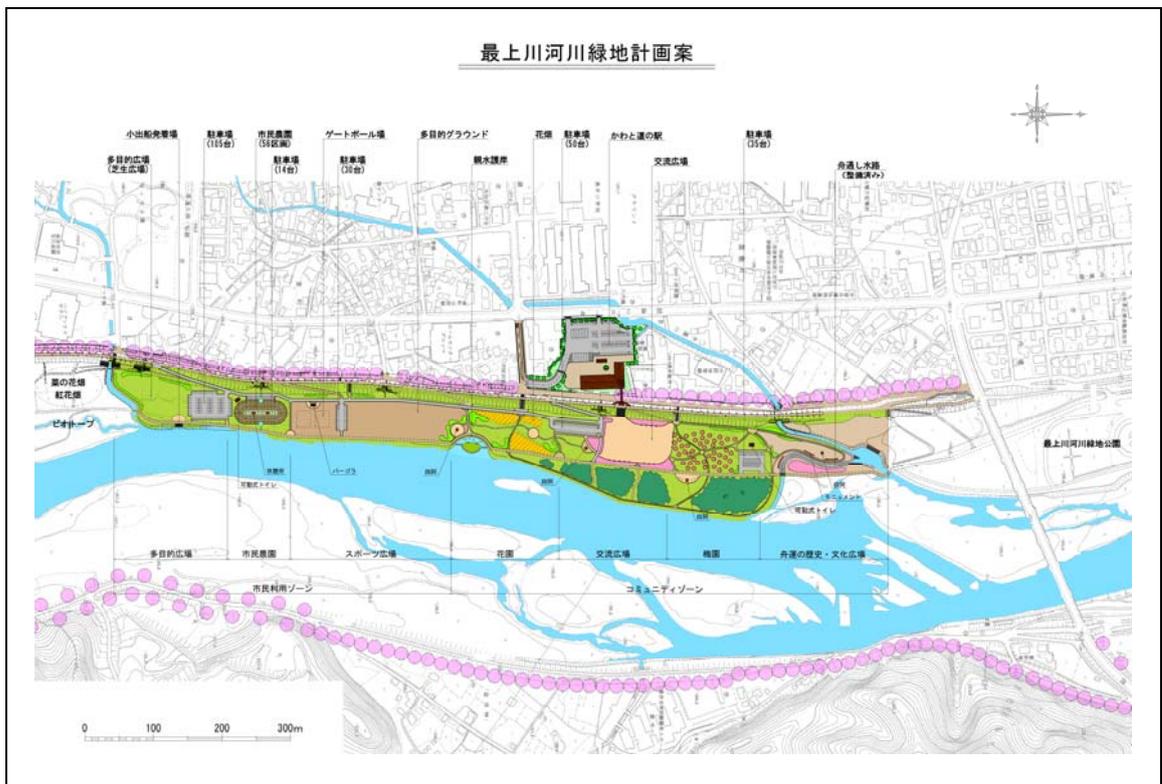
スポーツ広場には、駐車場（30台規模）や休憩施設としてパーゴラを設ける構想である。

●市民農園

市民からの要望もあり、区域内に市民農園の整備を図る。施設規模は、平均 25 m²の面積で 56 区画程度を想定し、専用の駐車場（14台規模）や休憩所、可動式トイレを設ける構想である。

●多目的広場（芝生広場）

多目的広場は、芝生広場として整備を図り、各種イベントなどを開催することが想定される。多目的広場付近には、駐車場（105台規模）を整備する構想である。



3. 基盤整備による効果

(1) 産業振興効果

●観光の活性化

国土交通省への登録制度により「道の駅」は、一定以上の水準が確保され、安心して利用できる休憩施設として広く認められている。さらに、各地で地域色豊かな魅力ある施設が整備され、休憩施設としてだけでなく「道の駅」自体が観光目的地となっている事例も見られる。

魅力ある施設整備を図り、さらに他の観光拠点・資源とのネットワーク化を図ることにより、観光の活性化を図ることができる。

●地元商店・農業などの活性化

(仮称)「かわと道の駅」の施設内に地場製品の販売スペースを設ける方針である。現在、(財)置賜地域地場産業振興センターが運営している市民直売所「おらんだ市場菜なポート」を発展的に本施設内に整備する構想であり、道路利用者に対し今以上にPR効果、集客力を有する施設整備を図ることにより、地元商店・農業などの活性化及び収益性の向上が期待できる。

●その他

- ・産業・観光の視点から見た都市間・地域間競争力の強化を図ることができる。
- ・雇用の視点からも多少ではあるが、雇用創出効果が期待できる。

(2) 長井市のシティセールス効果

全国的に長井市の知名度を向上させ、その魅力をより多くの人々に知ってもらう効果がある。全国で970を超える登録がされている「道の駅」が持つ情報発信機能及びネットワークを活用することにより、長井市のPR・シティセールス効果が期待できる。

(3) 地域の一体性促進・行政と市民の協働の場としての効果

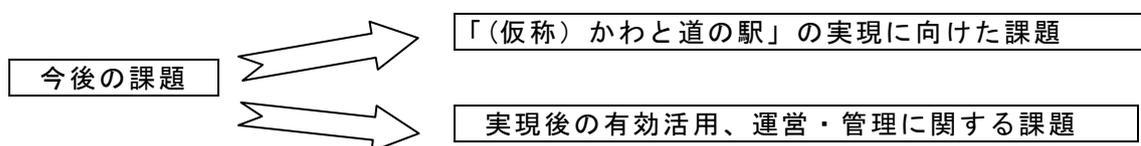
「(仮称)かわと道の駅」の計画、事業、管理・運営など、実現に向けては市民と行政の協力が不可欠である。長井市には数多くの「まちづくり」に関わる市民団体があり、これまでも行政との協働によるまちづくりが進められてきた。

観光振興、地場製品の販売、河川環境の整備など多くの要素を有する本施設の実現に向けて行政と市民・市民団体などが協力・連携して、実現を目指すことは、地域の一体性、アイデンティティを醸成するとともに、交流促進の効果がある。

4. 今後の課題

市民や観光客等に広く利用され、愛される観光交流拠点「(仮称)かわと道の駅」の実現を図るには、今後引き続き市民・行政・関係機関・団体等が協力して検討すべき課題が残されている。

今後の課題を大別すると、計画を実現するための課題と実現後の有効活用、運営・管理に関する課題の二つに大別できる。



(1) 「(仮称)かわと道の駅」の実現に向けた課題

①計画への市民意向反映など整備推進体制の継続的確立

本計画は、観光交流拠点施設である「(仮称)かわと道の駅」と河川緑地の一体的整備を目指すものであり、河川緑地は延長1kmを超える広範な区域が対象となる。河川緑地公園の整備は、今後段階的に進められていくことになると思われるが、計画・設計・整備の各段階において市民、地域住民、利用者等に幅広く意見を聞くことにより、人々に親しまれ、有効に活用される施設及び水辺空間の整備を図る必要がある。

このため、今回の計画策定にあたり、広く市民等の意見を募集する、パブリックコメントの活用を検討や、今回組織した市民・行政・関係団体などからなる「観光交流拠点施設計画検討委員会」のような市民意向を反映する協議・調整体制を引き続き継続的に確立・維持していく必要がある。

②関係機関との協議・調整

本計画は、観光交流拠点施設「(仮称)かわと道の駅」と河川区域の一体的整備を図るものであり、国道や市道の改修、拡幅やサインの整備などの事項について道路管理者との協議・調整が必要であるし、本構想で提案している施設と堤体をつなぐ連絡橋の実現や河川区域内に整備できる施設の構造・規模等については河川管理者との協議・調整が必要である。

その他の関係機関や関係部署・まちづくり団体等とも十分な協議・調整を行いながら計画を推進する必要がある。

③計画内容の詳細検討

本調査は、計画の第1段階としての構想・計画であり、実現に向けては事業費、スケジュール、河川緑地については地区別整備優先度など、事業化に向けた計画内容の詳細な検討が必要である。

(2) 実現後の有効活用、運営・管理について

①行政と民間が協力し合う運営・管理体制の確立

施設の運営・管理問題は、真に市民に親しまれ、利用される施設づくりの面から、また財政的・労力的な面からも重要な問題である。

本施設では、市民直売所や物産館を運営してきたノウハウを生かし、(財)置賜地域地場産業振興センターによる管理・運営について検討していく。

②安全な水辺活用のためのソフト面の確立

河川敷等の水辺は、魅力的な空間であるとともに危険がひそんでいる場所でもある。安全な水辺の活用のためにハード面だけではなく、安全利用に対するソフト面の対応・体制づくりも検討する必要がある。